夢幻商人と少女の戦争

沼野河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢幻商人と少女の戦争

【Ｎコード】
Ｎ３０００Ｒ

【作者名】
沼野河童

【あらすじ】
『キミは今、何か欲しいものはないか？』
中学二年生の燈村夕凪は夏休みの補習の帰り道、『夢幻商人（ヴィジョンズ・セラー）』という都市伝説の話を耳にする。それは『夢幻商人と名乗る人物から掲示された課題をこなした者は、どんなものでも手に入れられる』というもの。夕凪は、それを途方も無い御伽噺の一つだと思っていた。その存在と遭遇し、謎の課題を手渡されるまでは……。
夢を追い続ける少年少女たちの、非日常的ＳＦアクションストーリ

ー。

オープニング

何か欲しいものはないか？
この言葉を聞いたことが、今までの人生で何度あっただろうか？
それを言ったのが身内だったなら、幼い頃はおもちゃを、だんだんに成長していくとお金を要求したりするのだろう。見知らぬおじさんが言ったのなら、それは聞いてはいけないことなのだろうし、友達が訊いてきたときには、頭に浮かべた途方も無い空想を口にして、互いに笑いを誘うこともあっただろう。
そうではなくて。
キミは、本当に欲しいものについて考えたことがあるだろうか？単なる『物』ではなく、『見えない何か』を欲しいと、思ったことはないだろうか？　才能や能力、信頼、好意、もしくはそれらに類似したモノを……。
それらはお金で買えるものではなく、かといって、必ずしも努力で手に入れられるものではない。そして、本当に自分が手にしているのかも分からない。
人はそれら『見えない何か』を『夢』と呼んだ。
必ず手に入れられるものでなく、しかし人が耐えず求め続ける『夢』。
もしもそれらが、もっと単純な方法でどうにでもすることが出来るのであれば、人はどうするのだろうか。どこまでやれるのだろうか。
そして、それを手に入れることが出来たとき、彼らはどんな風になっているのだろうか？　彼らはそれを受け入れられるのか？
それを調べることが、ボクの課題である。
ボクの課題。
『人間は欲望のためにどこまでできるのか？』
何のことはない。誰もが考えそうなことで、興味深い課題だろう？

たとえば、法も秩序も、常識もない世界に、彼ら欲望の塊が行って、そこで突拍子も無いことをすることで確実に願いを叶えられるのであったら、彼らはどうするのだろう？

それを調べたくて、『自分』という存在は此処にいる。

だって、面白そうだろう？

『幻想は魅せられるもの、現実は見せられるもの』

これは詰まるところ、世界の常識だ。

少なくとも、ボクという存在は、そう思っている。

そこで、最初の質問に戻ろう。

「キミは今、何か欲しいものはないか？」

夏休み　ｉｎ　学校（前書き）

人名について

・燈村（ヒムラ）夕凪（ユウナギ）

夏休み　ｉｎ　学校

夏だ。

校庭の隅に生えている木々にはり付いた蝉たちはミンミンと五月蝿く鳴き、花壇の向日葵は風に揺れ、半袖短パンの小学生たちは田んぼの近くのため池でザリガニ釣りをやっているのが、窓の向こうに見えた。

机の上に片肘をつき、手の上に顎を乗っけて欠伸をしながら、少女はそれらを眺めていた。

肩より少し上の辺りで切り揃えられた後ろ髪が、窓から入り込む僅かな風に揺れる。ニキビという単語を知らないような健康的で少し日焼けした頬の上を、額から滲んだ汗が伝っていった。

外の景色を眺めながら、彼女はふと呟く。

「小学生はいいよなー。補習という学校ぐるみの嫌がらせがなくって」

そう呟く彼女の言葉は、少し男勝りな感じを漂わせていた。

他者いわく、女らしからぬ少女と言われている彼女――燈村夕凪は、とある中学校の三階の教室の窓際席にいた。

ついついこぼした愚痴に、我ながらと思い、うんうん　と頷く夕凪。

前にいる担任がジロリッ　と目を向けてきたが、その行動を数瞬前に察した彼女は顔を下げてノートを取る振りをすることで誤魔化した。

担任が黒板に目を戻したことを感じ、夕凪は再び窓の外に目を向ける。

校庭のトラックで、陸上部の男女が一〇〇メートルを一気に駆け抜けていくのが目を引いた。

ゴールと同時に互いに息を切らしつつも、笑いあいながら話し合っていて、そこにタイムを計っていた男子が冷やかしにいく様子が見える。
青春してんなぁ、とぼやきつつ、視線を教室の、数式のみが乱雑に書かれた面白みの無い黒板に向けて、夕凪は深い溜め息を吐いた。
「（あーあ、なんで中学の夏休みに登校して勉強しないとなんだろ……。青春の1ページにこんなもんいらないと思うんだけど……）」
教室内を見回すと、男子七人、女子五人がいるのが確認できた。クラス全体が三六人だから、ちょうど三分の一が補習を受けているわけだ。
意図的に授業をさぼっていた奴はそれなりに勉強してるし、どこかでしくじってしまった哀れな奴は、同じ過ちを繰り返さないために必死にノートに何かしら書き込んでいる。あまりに必死すぎて、担任に呪いをかけるための術をノートに記しているように見えなくも無いのだが。
そんなことを勝手に連想して苦笑すると、夕凪はそれとなく前に向き直ると、
目前にチョーク（白）が特攻してくるところだった。

「ふわっ!?」

急接近する白い棒状の飛行物体を視認するやいなや、夕凪は反射的に首から上を横に反らした。
棒状の白い凶器は夕凪の側頭部を掠め、撫でるように白い線を走らせていくと、悲しきかな、後ろの席で顔を上げていた少年の鼻頭に命中し「ぎゃんっ!」爆発四散する。
教室内のあちこちから「利賀ぁあああああっ!?」、「不幸の極みだな、これは」、「利賀君、顔真っ白ぉ♪」という、利賀とい

う男子生徒を心配しているのか蔑ろにしているのか分からない感じの声が飛び交う。
夕凪はというと、自分の不注意で人一人が犠牲になったことにあまり感心はなく、とりあえず若き命を散らした少年に両手を合わせて合掌すると、担任に一言。

「隊長、目標を誤りましたか？」
「いーや、間違ってはいなかったぞ。コースは、な」

隊長、もとい担任は新しい弾（チョーク）（黄）をその手に召喚しつつ、額に青筋を浮かべながらそれを投げる。
夕凪は飛来する凶器をじっと見据え、余裕を持ってそれをかわした。目標を外したチョーク（黄）は、またもコース上にいた利賀君の、今度は額に直撃した。
悲鳴と共に凄まじい音が二つ、教室内に響き渡る。
一つは、利賀君がチョークの連続攻撃に耐え切れず、悲鳴を上げながら椅子ごと後ろに倒れてしまった音。もう一つは、その様子を見てツボにはまった少女が一人、「あははぁー♪　利賀君、顔カラフルぅー」と腹を抱えて笑いながら、バランスを崩してひっくり返った音だった。
ちなみに、夕凪はその一部始終を見終えた後、前を向いて、担任に向かって叫ぶ。

「隊長！　隊長の誤射で利賀二等兵と藤柴軍曹が負傷しました！　よって、保健委員（えいせいへい）である自分は彼らを医療室に搬送したいのですが……」
「もとを正せばお前の授業態度の悪さが原因だろうがっ！！　あと普通にしゃべれこのエセ軍事オタがっ！！」

とても教師とは思えない暴言を吐く担任の手から、再びチョーク

が放たれる。先ほどと同じコースを、寸分の狂いもなく、だ。
（ふっ、同じ手を二度ならず三度までも。そんなん当たるか学習能力ゼロの三流投手め。後ろの利賀には悪いが、また避けさせていただくか……！）

と、一刹那のうちに夕凪は心の中で担任を罵倒しつつ、頭の重心を右に傾け始めた。
が、その時チョーク（青）の進行方向が、彼女の行動に呼応するかのように変化した。
直進していたチョーク（青）は左に、夕凪にとっての右に進路を変えたのだ。
つまり、自分の回避先に向けて、チョークがコースを変えた。

（しまった！　シュートだと！？）

シュートとは、簡単に言うとバッターから見て左側に曲がる球のことを指す。シンカーより球の沈みが小さいのが特徴の変化球だ。
そんな野球漫画のワンシーン的な解説を頭で展開しつつ、夕凪は回避方向を変更しようとするが、もう遅すぎた。
驚愕の表情をつくる彼女の顔面を、言葉で言い表せられない衝撃が襲い、視界を青の粉塵が覆い尽くした。
悲鳴など上げる余裕などなく、薄れる意識の中、目の前に飛び散る青の粉塵を見ながら、夕凪は思った。
夏はやっぱり海だよな、と。

日常　ｉｎ　保健室（前書き）

人名について

・藤柴悠里（フジシバ　ユウリ）
・利賀文哉（トガ　フミヤ）
・羽山由愛（ハヤマ　ユメ）

日常　ｉｎ　保健室

どこからか、聴き慣れた鐘の音が響いてきた。
薄目を開けて周りを確認すると、自分が白一色のベッドに寝ているのに気づいた。どうやら保健室にいるようだった。
ふぅっ　と息を吐きながら身体を起こし、体にかかっているシーツを除けようとして、ふと、右肩に重量を感じた。
そちらに目を向けると、茶髪に短いツインテールの小柄な少女が、夕凪の右腕にしがみつきながら寝ているのが確認できた。

「何をやっているんだ、悠里？」

あきれながら言葉を降りかけ、ついでに小さな頭を小突いてやる。が、あまり効果は無いらしく、少女――藤柴悠里は相も変わらずスースー　と寝息を立てていた。
そういや、コイツは寝たら物理的に起こすのは不可能だったな……　ということを思い出し、やり場の無い脱力感を発散するため、悠里の頭をやさしく撫でた。やわらかい髪質が手に伝わり、なんとなく癒される。
と、ふいにベッドの周りを囲むカーテンの一角が開かれた。
そちらに目を向けると、知ってる人物がこちらを見て、何か言うところだった。

「……何をほんのり笑顔になってんだ？　気持ちわりぃぞ」
「乙女の寝ている空間に断りも無く入り込んできて、開口一番がそれか？　カラフル顔の二等兵」
「二等兵じゃねえし、そもそも、カラフル顔になったのはてめぇのせいだろうが」

言い返しながら、知った顔の人物――利賀文哉は、ベッドの脇に置いてある丸いすに腰掛ける。

「つか、なんで藤柴はここで寝てんだ？」

「あたしに聞くなよ。菊野の青チョーク、顔面に喰らったところで意識飛んだから、何にも覚えてないんだって」

菊野というのは、夕凪や文哉、就寝中の悠里の担任である。通称『殺人チョーカー』と呼ばれる菊野は、大学時代に左腕投手だったそうで、授業中に余所見や無駄話をする生徒をチョーク投げで黙らせるという、一昔前の漫画に出てきそうな若い教師だ。

噂では、市販のチョーク一箱（三六本入り）片手に、地元の不良集団を『更正』の名目で壊滅させ、彼らを野球チームに仕立て上げて甲子園を目指したただの目指さなかったただのというのがあり、結構有名な人となっている。

その噂に興味を持ち、何度か授業中に決闘（要するに授業妨害）を申し込みしているのだが、今のところ、最高回避回数は五回で、全弾回避して彼に敗北を認めさせた者は、夕凪を含め、未だいない。

その最高回避記録保持者のおかげでチョーク塗れの文哉は溜息を吐きつつ、ここに至るまでの状況説明を始める。

「あのあと、気絶したお前を藤柴が担いで保健室に連れて行こうとして、重量に耐え切れずに潰れそうになっていたのを、俺が手伝ったんだよ」

「なるほど、保健室に運ばせていただく命を一人でこなそうとする心の広き我が友人に、学校一の阿呆が恩着せがましく」

「言い方が悪すぎだ。なんか意味不明な感じに内容が危なくなってきとるし。なんでお前の中では俺の扱いがそんなにひどいんだよ」

「黙れ、カラフル顔の雑兵が」

「だから、カラフル顔になったのはお前のせいだし。つか雑兵って、

なんかさっきよりランク下がってねえか？

「気のせいだ。というか、いい加減顔洗ってこい」

しっしっ　と手で追い払う仕草と共に放った夕凪の言葉に、利賀は渋々ながらも従い、カーテンの外へと出て行った。……思うが、ここに来るまでの過程で、何故ヤツは顔を洗おうとか思わない？ 気に入ったのか、あのチョークまみれのスタイル。

そんなことが頭をよぎった時、彼女の膝の上に何かが乗っかった。視線を下に落とすと、目をコシコシ擦っている小さな姫様が、シヨボショボした目で夕凪を見上げていた。

「あーあ、面白い感じだったたんのに～」

って起きてたんかい、このちびっ子は。

いきなり訳の分からない発言をかましながら膝の上にもたれかかった友人を見下ろしつつ、夕凪はそんなことを思う。とりあえず、返事代わりに彼女のほっぺをつまみ、横に引っ張ってみた。

「ふにゃぁ～」

……学校の保健室のベッドの上で、間の抜けた声を上げる少女の顔で遊ぶ。これが一女子中学生の麗しき夏の思い出に……、なるわけがない。

というか、なんだろう。この絵は、他人から見たらどう見えるのだろうか？

自分の顔で遊ばれているのに、いつまで経っても嫌がる素振りを見せず、逆に至福の笑みを浮かべる悠里を観察しながら思考を巡らせていると、またも無遠慮にカーテンが開けられた。

利賀のヤツ、もう帰ってきたのか？　と思いながらそちらに顔を向けると、夕凪は自分の当てが外れたことを自覚した。

視線の先に、美女が立っていた。
身長は男子平均の利賀より少し低い程度。光を反射させるほどの白い肌と、細く、だが女性的な部分はそれなりに強調された体格。これぞ生粋の日本人だろうと思わせる、墨のように黒く、長い髪。年齢は同じはずなのに、夕凪の目には、彼女は少し大人びて見えていた。故に、夕凪は彼女を美『少女』ではなく美『女』と表現したのだ。
そんな彼女の、黒曜石のように黒く澄んだ瞳が夕凪の姿を捉え、次に範囲を拡大して、悠里を視界に収める。
夕凪の鼻先数ミリのところまで顔を近づけさせられ、頬をつねられている少女の姿を、確認する。
そうして、沈黙の数秒間が流れていった。
和風美女は何かを理解したようにこくり、と一回頷くと、

「お邪魔しました……」

楚々とした態度で頭を下げ、開かれたばかりのカーテンを閉めようとして、
その手を、夕凪はがしぃっ！　と掴んで止めた。

「待てぃ」
「大丈夫……。私は何も見なかった……」
「見なかったことにしてくれ、ってんじゃなくて、誤解しないでくれ、って言いたいんだけど」
「大丈夫……。恋愛の形は人それぞれだから……」

何も大丈夫じゃねぇっ！　と半ば絶叫しかけるが、和風美女は淡々と告げながらもカーテンを閉じようとしているため、叫ぶ余裕などなかった。夕凪は交渉の場を作ろうと、彼女の掴むカーテンを引き留める体勢に入る。

　このまま彼女を放してしまえば『必見！　あの燈村夕凪と藤柴悠里が保健室のベッドにて・・・』なんていう目も当てられぬニュースが出来てしまうだろう。言葉に間違いはないが、実情が歪められる事必須の字面になることは明白だ。

　そして、もしそんなものが出来上がってしまった場合、長期休暇終了後には『燈村×藤柴、初体験ではどちらが攻めだったのか？』なんていう放送コード等に引っかかりそうなワードてんこ盛りの拡大スクープに成り果てるだろう。無論、そんなものが公表されたら、夕凪の学生生活は粉々に崩壊するだろう。……って、この内容は中学生に理解できるのか？

　それはさておき、そんな危機的状況の回避のため、夕凪は孤軍奮闘しつつ、そういえば悠里の奴は何をしてるんだ？　と思い、背後を振り返ると。

「なんでー？　なんでほっぺふにふにやめるのー？　気持ちいんのにー」

……愛くるしいお子様が不満を言いつつ続きを求めていた。どうやら寝起きのせいで、今の未曾有の危機勃発の切羽詰った状況に、脳の処理能力が全然追いついていないのだろう。

　あとでその頬引きちぎれるまでつねってやるから今は私を助けろ！　と心の中で叫ぶが、ベッドの上のお姫様には届くはずも無い。

　その様子を見ていた和風美女は、夕凪の目を見ながら、

「ほら、早く構ってあげに戻ってあげて……」

「要らない厚意をありがとう！　でもそんな不燃物をあたしは求めていないっ！」

　彼女の勧めをしっかり拒否しつつ、カーテン戦線を拮抗状態に固定しようと再度意思を固めた、そのとき。

「たーだいまーっと。……あれ、羽山？　来てたのか？」

唐突に、洗顔を済ませた阿呆が帰還した。

「あ、文哉君……」
「？　何してんの、お前ら？」

顔を洗ってさっぱりした利賀の疑問の声に、和風美女——羽山こと羽山由愛はそちらに意識を向けた。彼女の手からカーテンが放れ、いきなりの動作に、咄嗟に対応できなかった夕凪は、思いっきりバランスを崩した。

「どわぁああっ！」

体勢を保とうとしたが、その努力も空しく、ビタンッ！　というやたら痛い音を立てて勢いよく床に倒れた。顔面からフローリングの床にぶち当たり、壮絶な痛みが鼻を中心に広がる。

反動で涙目になりつつ顔を上げると、未だ寝ぼけ眼の悠里が「ゆーちゃん、顔真っ赤っかー」とやたら舌足らずな感想を呟き、由愛は突然の状況についていけずにポー……っとした顔で夕凪を見下ろし、利賀にいたっては「ぶっ！」と噴き出していた。

……とりあえずムカがいったので、うつ伏せの状態から華麗に体を滑らせ、利賀の足を引っ掻ける。同時に、その回転力を利用して緩やかに立て膝へ、さらに力の流れを巧みに操って、最終的に立ち上がることに成功する夕凪。そして入れ替わるように、乙女の羞恥を笑った阿呆は床に後頭部から着地、もとい墜落した。

ゴンッ　という、鈍い音が室内に響き渡る。そして、それを掻き消すように、夕凪へおー！　という感嘆の声と共に拍手が送られた。

夕凪は衣服についた汚れを払いながら、後ろで倒れている利賀を見下して、
「ったく。人の不幸を、しかも女子の不幸を笑うなんざ、万死に値するっつーの」
「……………」
「おい文哉、聞いてんのか？」
「……………」
「………、文哉？」

返事が無ぃ。返ってこない。
他の二人も異常に気づいたのか、拍手を止めて、利賀を見下ろす。
そして、床に倒れた少年が白目を剥いたまま、ピクリとも動かないことに気づいた。
辺りが異様に静まりかえる。
室内にある時計の針の音だけが大きく響き、嫌な感覚と共に夕凪の額に汗が滲む。

「少し、やり過ぎだったのでは？」

首を傾げて告げられた悠里の一言に、夕凪ははっ　と我に返ると、手近にあった花瓶を引っつかみ、活けられた花を引っこ抜いて由愛に押し付け、

「目を覚ませぇえええええええ！」

花瓶の中の水を、昇天しつつある利賀の顔にぶっ掛けた。
その後、少女たちの必死の救命活動により、一〇分後、利賀文哉はその体に魂を戻し、覚醒するに至ったのである。

噂話　ｉｎ　帰り道

「んのー、今日も充実した一日だったんのー♪」
「せっかくの夏休みを補習で潰されているというのに、なんとまぁ幸せそうなこって」
　悠里が心の底からの叫びです　と言わんばかりに明るく告げる様子に、脇で見ていた利賀が溜息を吐く。
　保健室を後にした夕凪たちは、今は登下校の際に通学者が活用している歩行者専用のレンガ道を歩いていた。
　時刻は日が沈みかける夕方。左右に並ぶ住宅からは、まな板の上で何かを刻む音やら鍋で煮る音、それに加えておいしそうな献立の匂いが香ってくる。
「んのー、ここの家は魚の煮物なのー？　あっ、あっちはなんかカレーっぽいのー」
「お前っていつも楽しそうだよな」
　悠里の呟きに対し、右隣にいる利賀が半ば呆れたような様子で再度コメントする。その様子を二人の後ろから眺める由愛と夕凪。
　不意に、文哉が夕凪のほうを向いて、不満そうにこう告げた。
「ところでユウよ。お前は俺に謝るべきことがあるだろう？」
　なんだこの腐れ野郎は、いきなり訳の分からないことを言うなーと思いつつ、とりあえず反応する夕凪。
「なんであたしがお前に謝らないといけないんだ？　まるであたしが、お前を生死に関わる状況に追い込んだみたいじゃないか。お前

の命を救った恩人なのに」
「追い込んだんだよ！　ほんの数分前に、学校の保健室で！　しかもお前の手によって！」
「あれは自業自得だろ？　お前があたしを笑うから悪い」
「お前のこと笑う人は死んで良しって、んな無茶苦茶な法律があるかー！」
「法律はねーよ、常識だろ。女の子笑うなって、お母さんに習わなかったのか？」
「それ『笑うな』じゃなくてたぶん『泣かすな』だから！　そしてお前はどう考えても女の子の枠外だから！」
「何を馬鹿なっ！？　こんな大和撫子に向かって何を言うんだ！」
「ユウを大和撫子と認めたら、世の男女は全て清純派乙女だよ……」
「なんだそれ！？　まるであたしがス◯ィーブン・セ◯ールみたいに屈強な漢に聞こえるぞ！」
「そこまではいってねぇよ、ていうか勝手にそんな有名人と比較するなっ！　謝れ、ス◯ィーブン・セ◯ールに！」

ぎゃあぎゃあ　と、由愛と悠里にとっては見慣れた口喧嘩が、目の前で展開される。
悠里はにんまりと口元を緩ませながら、

「んのー、いつ見ても仲睦まじい夫婦喧嘩。愛漂うんのー」
「誰と誰が夫婦だっ！？」
「んのー、さすがはユーちゃん。頭に血が上ってても気づくんだね♪」
「それは馬鹿にしてるのか？　それとも貶しているのか！？」
頭から角が出てもおかしくないほどに、表情が憤怒のそれになっていく夕凪。その様子を見ていた文哉がどうどう　と彼女を宥めようと、

「本気に取るなよ……。明らかに弄り心丸出しだろ、奴は。乗るとさらに遊ばれるぞ」

そう言って、彼女の肩を押さえる。その行動からは、ほんの数秒前まで口論していた相手に対する対処とは思えないほど、丁寧なものだった。

が、怒り心頭の夕凪には、そんな阿呆の戯言など聞こえてはいない。

「何を冷静に受け止めている殉職者ぁあ！」

「俺死人扱いっ!? ……あれ、でも二階級特進だから喜んでいいのか？ 二等兵から軍曹まで一気に昇進なんだよな、確か」

馬鹿が何かブツブツと呟いていたが、夕凪は「こっちの知ったことではない。そんなことより、今は変な御伽噺を作り上げげんとする魔性の女を、この手でひねり潰しておかなくてはっ！」……という気持ちで一杯だったため、そのまま無視。

考えることを捨てた野獣が、指先の関節をボキボキと鳴らし始めた、そのとき。

「これこれ、目先の欲に目がくらんで、問題点を見失うのは駄目だよ」

不意に放たれた落ち着いた声に、一瞬我を忘れかけていた殺戮者と殉職者一名は『はっ』と我に返る。

静止の声は、悠里の向こうを歩いていた由愛のものであった。

夕凪は戦闘態勢に入ろうとしていた右手を収め、ふーっ と息を吐いた後、呟く。

「あ、危ねー……。こんな小さな友人の小さいことでキレて警察沙汰になったら、この先の人生すっげー損してたわ」
「俺の殉職って小さいこと！？」
「ゆーちゃん今私のこと小さいって言ったの？」
「ありがとなー、由愛――。目ぇ覚めたわー」
「大した事じゃない」
「ちょっと誰か構ってくださいっ！　ものすごく寂しいんですがこのポジション！」
「ゆーちゃん？　いくら利賀くんでも無視はよくないと思うなー」
もっともな助言をした悠里に向かって「いくらって何いくらって！？」と叫ぶ阿呆が視界の隅でうるさかったが、無視して親友の善行にハグで感謝する夕凪。そうしながら、由愛の耳元に口を近づけて、密かに問いかける。
「（つか、本当に疑問なんだけど……。なんでお前はあの阿呆と付き合ってるんだ？）」
「（好きだから）」
即答だった。
夕凪は怪訝な表情を浮かべると、由愛の目を見て、
「（阿呆が好きなのか？）」
「（違うよ？　好きなのは文哉君だよ？）」
おかしい。会話は成り立っているようで、どこか擦れ違っている気がする。
由愛は小首を傾げて、頭上に疑問符を浮かべたような仕草をした。
……どうやらこれ以上彼女と会話を続けても、こっちの頭が疲れるだけのような気がする。

夕凪はハグの体勢を解くと、話し相手を替えることにした。
もう一人の親友、もとい先ほど血祭りにあげようと思った、自分の胸辺りまでの身長しかないちびっこ悪女の方に顔を向けると、彼女は落ち込んで肩を落としまくっている文哉の頭を撫でていた。どうやら、彼女なりに慰めているつもりらしい。
……慰められている少年は、撫でられるたびに肩の高さが低くなっているが。
「(慰められてさらに落ち込むくらいなら、頭を差し出さなきゃいいのに……)」
そう思いながら、夕凪は悠里に話しかけようと、口を開きかけたところで、先に悠里のほうがこちらを向いて言ってきた。
「ねえユーちゃん。『ヴィジョンズ・セラー』って、知ってるん？」
「は？　ヴぃじょんず、せらあ？　何それ」
いきなり親友の口から発せられた意味不明の単語に、夕凪は不器用に復唱しながら聞き返す。
悠里は自分の小さな顎に人差指を押し当てながら、「知らないんの？」と言う。普通の女子がやるとなかなか様にならないが、見た目が幼い彼女がやると、ちょうど身長差も重なって確実に上目遣いになってしまうため、かなり刺激が強い。何というか、ここで意にそぐわない回答をしては、悪い形で後に引きそうだ　と思わされるくらい。同姓である夕凪でも、ムカつきもせずにおとなしく『YES』の道を進んでしまうことが、その魔力の強さを物語っているだろう。
「なんだよ、その、『うぃじょんずせらあ』っていうのは？」
「ユウ、なんかものすごいバカっぽく聴こえるぞ。お前の発音はぐ

っ！？」

文哉の奴がなんか言っていたが、奴の顔面に裏拳を叩き込んで黙らせる。……英語は苦手なのだ。特に文章の朗読が。
沈黙した文哉を無視して、悠里は説明を始めた。

「んのね、今クラスで話題にあがってるんだけどね。最近、この町で黒いフードを被った男を見かけたっていう話、知ってるん？」
「ああ、そういえば昨日の学校の不審者通報に載ってたわ。このくそ暑い夏に、馬鹿みたいに黒尽くめの格好してるやつが、日中近所を歩いてるって話でしょ？」
「んの。その話だよ」

夕凪の言葉に頷く悠里。
と、由愛がおずおずと手を挙げながら、

「……あの、それだけで、不審者扱いになるの？」
「いや、だって真夏だぞ？　直射日光だけで人をぶっ倒しかねないこの季節に黒尽くめになるなんて、頭がオシャカになってるヤツ以外にどう見ろっつーんだよ」
「……その人の、マイブーム的ファッションとか」
「自らの命を賭してまでやる必要のある服装か……？　黒尽くめファッソン」
「んのー、ファッションだよ、ゆーちゃん」
「細かいことは気にするなっての」
「……すでに頭がオシャカになってんのって、ユウのほうじゃねぐれらっ！？」

いつの間にか立ち直っていた文哉を、その鳩尾に裏拳を叩き込んで再び黙らせる。私の頭がオシャカだと言うなら、てめぇの頭はす

でに御臨終だっつーの。

「というか、話脱線してないか？　その野郎と『うぃじょんずせらあ』ってのに、なんの関係があるんだ？」

「うんにゃ。それそのものなの」

「？」

即答してくれた悠里の言葉の意味が分からず、夕凪は首を傾げる。その様子を見てか、悠里は補足するという感じに言葉を続けた。

「要するに、その黒フードの男の正体が、件の『ヴィジョンズ・セラー』っていう伝説なの」

「ものすごい信憑性の無い伝説だな、おい」

「ちなみに、当て字は『夢幻商人』なの」

「いや、聞いてないし」

いらんいらん、と手を振って話しを切りつつ、夕凪は溜息を吐いた。悠里はというと、そのジェスチャーを見なかったことにして勝手に話を続けている。

「夕方の、太陽が真っ赤になっている時間に人気の無い道を通る子どもの目の前に現れて、出会った子供に夢を叶えてくれるアイテムをくれるんだ、ていう話なの。同じクラスのあすかちゃんに聞いた話だから、間違いないと思うの」

「へー」

眼をキラキラと輝かせながら話す、まんま子どもな悠里の言葉に適当に相槌を打ちつつ、夕凪は納得する。要するに、『変な格好した人間＝都市伝説的な存在』という風に絡めた、妄想気味の阿呆の見解が、悠里の『夢幻商人』だとかの話の大元らしい。

あすか、という少女の名も、かなりのオカルト大好き少女だと学校の噂で聞いたことがある。

「（ていうか、わざわざそんな限定的環境設定で現れるとか、ＲＰＧのイベントか、ってーの。てか、『太陽が真っ赤になっている時間』って、要するに夕暮れ時ってことか？）」

「ゆーちゃん、なんか言ってるん？」

「いやべつに」

いつのまにか悠里が疑りの眼でこちらを見上げていた。こういう独り言とか陰口などには敏感な性質だと、前に本人から聞いたことがあったなぁと思い出しつつ、彼女の視線から逃れる。

悠里はまだ訝しげに見ていたが、そろそろと表情を和らげ、話を続けた。

「でね。この話には続きがあってね」

「へぇへぇ」

「夢幻商人に遭遇した人は、その大半が行方不明になってしまうの」

「ふーん」

「何故かって言うとね。夢幻商人が渡してくれるアイテムっていうのには、それを使うための『資格』が必要で、その『資格』を手にするための課題をクリアする過程で、別の世界に行っちゃうらしいの」

「ふむふむ」

「んのー……、ゆーちゃん、適当に聞き流してない？」

「あぁ。その通りだ」

またも疑わしげな眼差しを向けてきた悠里に、夕凪はさらりと答える。その反応に膨れると思ったが、むしろ呆れたらしく悠里が溜息を吐くのを確認して、夕凪は口を開いた。

「だってお前な。そんなゲームみたいな設定だらけの噂話聞いて黄色い声上げる奴なんざ、今時小学生でもいないぜ」
「噂話じゃないの、都市伝説なの！」
「似たようなもんだろ？」
「噂話は信憑性がないけど、都市伝説は受け継がれている分、信憑性濃いんだよ！」

どこに焦点合わせたらそんな見解が生まれるんだ？　と疑問に思ったが口には出さなかった。言い返すだけ無駄な気配のする話題は適当に流す性質なのだ。
その後も、悠里が「イタリアのネットのブログで体験者が」とか「四年前の少年行方不明事件が実はそれと」とか力説していたが、夕凪はそれらを適当に聞き流していた。
そうこうしているうちに、一行は十字路に到着した。ここに来ると、夕凪と悠里は左右に、文哉と由愛は前方の道へと分かれることになる。

「んじゃ、また明日、学校でなー」
悠里の趣味話から解放されることに心の中でほっ　としつつ、夕凪は荷物のほとんど入っていない鞄を背負い直しながら皆に背を向けようとした。
するると、背後から文哉が呆れた声で、
「また明日なー、って。明日は補習休みだぞ。ユウ」
「え？　あー……、そうだっけ？」
言われて記憶を掘り返してみると、確かにそんなことが夏休みの日程表に書かれていたような気がする。
夕凪はバツが悪そうに振り返ると、頬を指でポリポリと掻きなが

ら、

「えーっと、あれだ。明日は一緒に遊ぼうぜ、という意味で言ったんだよ、あたしは」

「補習もねぇのにわざわざ『学校で』遊ぶのか？」

「そ、そこに意外性を持つというあたしの発想っ！」

「却下却下。そんなんするくらいなら、不破ん家行ってゲームやってた方がよっぽど有意義だってーの」

「（けっ、この引きこもりが）」

「引きこもりじゃねぇよ。つか聞こえてるし」

「黙れ雑兵が」

「だから雑兵じゃねぇべはぁっ！？」

空気を読めない阿呆を蹴り倒して地面に沈めると、夕凪は顔を上げ、「んじゃ、またなー」と二人の親友に陽気に別れの言葉を告げる。

彼女らに背を向けて駆け出そうとして、夕凪はふと西の方角を見た。

沈み始めた太陽が、空をどこまでも紅く染め上げていき、まるで上空を燃やしているように見える。

「（夕暮れ時に現れる黒づくめ、ねぇ……）」

そう呟いてから、夕凪は帰り道を駆けていった。

遭遇　ｉｎ　公園

二〇〇メートルほど進んだところで、夕凪は駆けるのを止めた。辺りを見回し、自分が近所にある公園の時計塔の下にいるのを確認する。

時計塔は、小さなグラウンドを見下ろすように小高い丘の上に立っており、その後ろには半円状に、木と石で出来たベンチが並んでいる。ベンチは一繋がりで、一定間隔にてんとう虫やかえるの像が置かれている、この公園独特のベンチである。

夕凪はそのベンチの、てんとう虫の像の横に腰を下ろした。ふうっと息を吐き、顔を上げると、誰もいないグラウンドを沈みかけている太陽が照らし、時計塔の長い影、が自分のすぐ横を通過しているのを見た。

辺りは静かだった。

無音、というわけではない。近くの茂みの中では虫が鳴いているし、時折、遠くから帰宅途中の人々の笑い声が風に流れて聴こえてくる。

「…………………」

日暮れ時の涼しげな風に当たりながら、夕凪は目を閉じ、もう一度、小さく息を吐いた。

この時期、この時間帯、この場所には誰もいない。

小学生はとっくに家に帰っている時間帯だし、老人たちの散歩には少し暗すぎる道となるため、部活帰りで帰路を急ぐ中学生や高校生くらいしか、この時計塔周辺を通らない。

しかも最近、それを知る素行の悪い連中が、そういった帰宅途中の中高生を標的にする悪質な事件も起こり、それ以後はこの時間にここを通る者も減っているのだった。

道が避けられるようになってからは、狩る者が居なくなったことを悟ったらしい不良連中も、やがてここにたむろすることを止めたらしい。
こうして、ついに誰一人拠りつかなくなったこの場所は、夕凪専用の憩いの場と化したわけである。

「…………暇、だな」

石で出来た堅い背もたれに背中を預け、空を見上げる。薄闇が徐々に広がる上空には、すでに一番星が輝き始めていた。
腕時計を見ると、デジタル数字が六時を越えたことを示している。夕凪は腕時計の表示板をじぃっと見つめ、不意に操作スイッチを何度か押した。
表示板の数字が切り替わり、表記は一〇数分前の時間を表示する。丁度、夕凪が友人たちと他愛の無い会話をしながら下校していた頃の時間だった。

「………………………」

夕凪は現在時刻とは違う時間を示す腕時計をじっと見つめる。時計の数字は、変更前と変わらないペースで着々と切り替わっていた。
デジタル数字が操作前の時刻を示した頃、彼女は深い溜息と共にベンチの上に寝転がった。
そのときだった。

「一人かな？」

唐突に、聞き慣れない声が近くからした。同時に、人が存在する気配も感じられる。

辺りを見回した夕凪は、少し離れたところに生える木陰の暗がりに一つの人影が佇んでいるのに気が付いた。気配の持ち主はその人物のようだった。

「一人、かね？」

夕凪は問いかけに答えず、相手の方を注視する。

声を掛けてきたその人物は、暗がりから夕日に照らされた場所に移動してきた。奇妙な姿の男だった。

服装は真っ黒。頭から下までを黒いレインコートのようなもので包み、袖から出ている手には黒い皮グローブを付けている。唯一肌を晒している顔も黒く、長い口髭は勿論、瞳や肌の色まで、テレビで見るようなアフリカの黒人よりも黒い色をしている。

はっきり言って、日本人には見えない。そして、夕凪の知識の中にあるどの変人よりも、目の前にいる人間は群を抜いた変人に見えた。

その変人、もとい黒づくめは、いつまで待っても返事を返さない夕凪をその黒い双眸で見下ろしていたが、不意に何かを思いついたかのように手をポンと打つと、

「君は、一人かな？」

丸っきり日本人には縁遠いと言える目の前の黒づくめは、もう一度、丁寧な口調で言った。流暢な日本語だった。

「まぁ、そうっすね」

夕凪は投げやりに返答し、続けて、

「周りに自分の知人友人、はては見も知らぬ他人がいなければ、そ

うなるでしょうね」

夕凪の発言に、黒づくめの男は少し眉根を上げたが、やがてくっく　と唸るような声を洩らした。

（もしかして、笑ってんのか？）

夕凪が変なものを見るような目（実際、変な人物なのだが）で見ていると、黒づくめは顔をあげながら、

「ああ、失礼。君の発言があまりに面白くてね、ついツボにはまってしまったのだよ」

そう言って、また黒づくめはくっく　と声を洩らす。

そこまで面白いか？　と、実は適当に付け加えて言っただけの言葉を思い返す夕凪。

と、黒づくめが笑うのを止めて、口を開く。

「つまり、私の発言は少し的外れだったようだ。私という『見も知らぬ他人』がいる時点で、君は『一人』ではないのだから」

「まぁ、そうなるっすね」

「それに、君はなかなか面白い言い方をするが、それに加えて、少し男勝りな口調で話すな」

「下手なお嬢様口調だと周囲の人に舐められますし、第一、性に合わないもんですから」

そう答えながら、何で自分は目の前の黒づくめに、自分の口調について説明しているのだろうか　と少し疑問に思った。あまりにも異質過ぎる格好と丁寧な口調が相互反応を起こして、この黒づくめの周囲に親しみやすいオーラでも放たれているのだろうか？

と、黒づくめの男はゆっくりと頷きながら、

「ふむ、個性的でいいな。ではそんな君に、一つ尋ねてみようかね？」

「？」

異様な雰囲気の言葉に、夕凪は疑問符を頭上に浮かべる。それに気づいたのか、黒づくめ　口の端を緩ませて柔和な笑みの形を作り、その口から、こんな言葉を放った。

「君は今、何か欲しいものはないか？」

誘惑　ｉｎ　公園

数秒の間、沈黙が辺りを包んだ。

太陽はようやく二分の一まで沈み、辺りは夕闇に飲み込まれていく。

周囲に他の人影は無く、黒づくめの男とセーラー服姿の夕凪の影が細く、長く地面を駆っていた。

夕凪は黒づくめの放った言葉を頭の中で反芻し、それに対する答えを検索し、もっとも最適と言える答えを返した。

「えと、それはもしかして誘っている、とか？」

「うん、まぁそうなるかな」

黒づくめは何のこともなげに言った。その様子を見て、夕凪は深い溜息を吐きつつ、頭を抱える。

どうやら、目の前に立っている変わり者は、旧時代の誘拐犯気取りのお方らしい。一人で遊んでいる子どもや帰宅途中の子どもに、やれ「坊や、お菓子はいらないかい」とか「お母さんが事故にあったらしいから」などと良い人振って自分の車にご案内し、そのまま連れ去って身代金を要求するという、非常に単純で稚拙な犯罪例の一つだ。無論、『疑わしきは罰せよ』、『汝、隣人を疑え』などと教育されている現代っ子たちが引っかかるわけは無い類のものだが。

（こういうのを、『じぇねれえしょん・ぎゃっぷ』って言うんだっけか……？）

真剣に、頭痛を発症させるほどの黒づくめの突拍子な発言に、夕凪はかなり引いていた。

一方で、黒づくめの方は夕凪の反応など一切気にせずに話しを続

ける。

「君が求めるものを何でも与えよう。まぁ、いくらなんでも、タダではないけどね」

そう言いながら、黒づくめは自分のフードの下に手を突っ込みながら、ゴソゴソと何かを取り出そうとして、

「ちょい待ちっ、おっさん」

「ん？」

夕凪の叫びで、その手を止めた。

年齢一五才の可憐（？）な少女は、『待った』のジェスチャーを出しながら、視線をあちこちに泳がせつつ、

「いや、あたしは、そういうのはちょっと……」

こういうのってどういう風に断ればいいんだろ？　と若干変な方向に思考が働き混乱気味の夕凪に、黒づくめは意味が分からない、という風に怪訝な目をしていたが、やがて手を打つと、片手を顔の前で左右に振りながら、

「ああ、違う違う。『タダではない』っていうのは、少し『課題』をやってもらうってことさ」

「はぁ、『課題』、っすか？」

「そう。『課題』」

想定外の答えに、今度は夕凪がキョトンとした表情を取る。それを見て、黒づくめは小さな笑みを浮かべると、フードの下から手に取ったものを取り出し、夕凪の前に差し出した。

なんとなく手にとって見てみると、クリアカバーのディスクケースだった。中には見慣れた円型ディスクが入っている。
「何のディスクっすか、これ」
「それが、君のような子どもが求めるものを得るためにクリアすべき『課題』だ」
「ふーん……」
ちなみにPCで起動可能だ、と説明を付け加える黒づくめを軽く無視して、夕凪はディスクを眺める。どう見ても、表に『課題：1』と書かれているだけの何の変哲も無いディスクにしか見えない。
ふと、夕凪は黒づくめの正体を聞くのを忘れていたことに気が付いた。
「そういえばおっさん。あんたっていったい」
何者さ、と尋ねようとして、夕凪は違和感を感じた。
唐突に現れた不可解な『それ』に、彼女は眉をひそめ、顔をあげる。すぐに『それ』の正体がわかった。
つい数秒前まで居たはずの黒づくめが消えていた。
「え？」
すぐさま立ち上がって辺りを見回したが、黒づくめはおろか人影の一つも見当たらない。
時計塔から離れ、周辺の死角となっているところも見てみたが、そもそも人がいた形跡すら見受けられなかった。
いつの間にか日も落ちきり、辺りは夜の闇に沈んでいる。時計塔に寄りかかりながら、夕凪は思考を巡らした。

「暗闇に溶けて消えた、とか？　幽霊みたいに」

冗談だろうと内心で笑いながらそう呟いたが、実際は笑みなど浮かべられなかった。

隣にいた人がいつの間にかいなくなっている、ということはよくあるが、それは一〇数秒間の間を空けているためとか周囲に人気が溢れているときに起こる現象だ。誰もいない一対一の場で、たった数秒目を放しただけで、見晴らしのいい時計塔周辺から離れることなどが、果たして常人にできるだろうか？

(普通の人じゃない、とか？)

一種の可能性が頭に浮かんだが、夕凪はすぐにそれを否定する。例えば、彼が超能力者や某国の諜報員であるならば、それも不可能ではないかもしれない。

だが、そんなものが日常で繰り広げられるのはフィクションの世界であることくらい、さすがに夕凪にも理解できた。

近くにたっていた街灯に光が灯り、夕凪を照らす。

彼女の頭の中では、数分前の会話が再生されていた。

『君は今、何か欲しいものはないか？』

「『欲しいもの』って、なんでもいいのか……？」

誰にともなく問いかけるように呟いたその声は、しかし誰にも届かない。

まるで夢か幻を見たかのような表情をする夕凪の手には、黒づくめから受け取ったディスクケースがあった。

それだけが、数分前の出来事が夢ではないということを夕凪に告げているのだった。

回帰　and　事件（前書き）

人名について

・八雲（ヤクモ）海璃（カイリ）
・峰木（ミネキ）蚕（カイコ）
・不破（フワ）竜（トオル）

回帰　and　事件

『四年前の夏、この町で謎の連続失踪事件が起こった。
それは七月二三日の夕方五時。当時小学六年生であった八雲海璃少年が消えたことから始まった。
彼の友人の話によると、鬼ごっこをしていた彼らは五時に鐘が鳴ると集合場所にしている東屋に一旦集まった。そこで、友人の一人が海璃少年のいないことに気づいたのだ。
その後、いくら待っても姿を現さない海璃少年を、友人たちは手分けして探すことにしたが一向に見つからない。夏場の高い日がついに傾き始め、不安を感じた彼らは家に帰り、このことを親に報告した。
事情を飲み込んだ大人たちの一人が八雲家に連絡したが、海璃少年は帰宅しておらず、不安に駆られた母親は警察に連絡。警官隊の他、近所の住民三〇数名による山狩り同様の捜索活動が公園とその周囲で行われた。
しかし、三日間かけて一帯を調べまわるも、海璃少年はおろか、その痕跡すら見つけられなかったという。
警察は『迷子の捜索』を打ち切り、海璃少年の失踪事件を誘拐事件に切り替えて本格的に捜査を開始するが、一向に手がかりが掴めずにいた』

『それから三ヶ月後、二つ目の事件が起こる。
失踪したのは峰木蚕。当時中学一年生の女子であった。
現場は海璃少年が失踪した例の公園から数百メートル離れた大通り。そこに建っていた花屋の店先である。
目撃者である花屋の店員の証言によると、夕方の五時過ぎに店内の品物を整理していたところ、一人の少女が店の外の花を見て回っていたのを見たそうだ。その少女の名が、峰木蚕である。学校帰り

によく店の前に来ては店員に話しかけてきたり、稀に花を買ってい
く彼女の姿を知っていた店員は、いつものことだと思い、さして気
にすることも無く作業をしていた。
一〇数分かけて店内の整理を終え、ふと店先に視線を移すと、蚕
が黒い服を着た男と会話をしているのが見えた。
最初、店員は男が彼女の知り合いか何かだと思っていたのだが、
蚕が男に向ける視線に親しさを感じさせるものが一切無いことに気
づき、怪訝に思った。男が誰なのか、蚕に訊ねようと思った店員は、
そこで足を踏み出した拍子に爪先を近くの商品棚にぶつけてしまい、
植木鉢を一つ、床に落としてしまった。砕けて撒き散らされた土と
植木鉢の破片を見て頭を抱える店員が、もう一度、店先の方を見る
と、次は目を疑うこととなった。
数瞬前までいたはずの蚕と男が忽然と姿を消しており、彼らの居
たところには近くの中学校指定の鞄が一つ、ポツンと転がっていた
だけだったのだ。
すぐさま大通りに飛び出して辺りを見回したが、蚕や男はおろか、
人影一つ無い状態だったそうだ。
その後、店員は警察に通報し、事のあらましを説明。次に峰木家
に連絡すると、彼女はまだ帰宅していないという。
蚕の身辺や私物には手がかりとなりそうなものが無く、警察は一
緒にいた男が怪しいと見て、誘拐事件として捜査を開始。しかし、
不可解な点があまりにも多かった上に、峰木蚕の近親者から聞いた
とある情報により、捜査は僅か数日で中断された』
『現在、この二人の少年少女の失踪事件は、多くの未解決事件の山
に埋もれている・・・・・・』
「だからなんだ」
パソコンのディスプレイに映っている文章を一通り読んだ彼は、

溜息を吐いてそう愚痴った。
切れ長の目に、頭に巻いたタオルからはみ出て肩まで伸びている長い黒髪。一八〇センチ以上の長身に加えて、スポーツマンらしい筋肉質の身体。
妙な威圧感を周囲に与えている容姿の持ち主の名は不破竜という。
彼が見ているのは、地元のローカル記事の一面を飾った事件・事故をピックアップして個人的に要約し、感想を募っているブログの記事だった。そこには、ブログの開設者自身の見解のほかに、このブログを見た者の書置きも投稿されている。
それらを一読した竜は、画面を操作してメールボックスを開き、とある受信メールを引き出した。その文面は「ドラゴンへ　面白い記事見っけたから送るよん♪　ｂｙユーリ」というもので、文章の下には、先ほど竜が閲覧していたブログのアドレスが書かれていた。
「悠里のヤツ。俺が『こういう方面』に関心の無いことは知っているだろうに」
そう溜息混じりに呟きながら、彼は悠里への返信メールを打ち始める。
と、その時、
「邪魔するぞー」
聞き慣れた声と同時に部屋の襖がスライドする音が聞こえた。
竜はキーボードの上で踊らせようとしていた指を一旦硬直させ、深い溜息を吐いた後、首を回して音源を見た。
闖入者は、自分に注がれている視線に気づくと、部屋の隅にあるベッドの上に座って片手を挙げながら、
「邪魔するぞ、リュウ」

「トオル、だ。夕凪」
　訂正する竜に、ベッドの上にあった漫画雑誌に手を伸ばしていた夕凪は「うんうん」と頷きながら、
「でもさ、なんかリュウの方がカッコいいじゃん」
「格好良さで改名を余儀なくされるのは我慢ならんな」
「じゃあ悠里のドラゴンは有りなのかよ？」
　そう言ってパソコンのディスプレイを指差す夕凪。どうやら部屋に入られた時に、脇から覗き見られていたようだった。
　竜は顔色一つ変えずに、
「悠里のはあだ名だからな」
「あ、差別」
「差別じゃない。俺が気に入るかの問題だ」
　それを差別っていうんだろ？　と文句を言う夕凪に背を向け、竜はパソコンのキーボードを叩き始めた。
　夕凪は自分が無視をされたことを悟って諦めたらしく、手にある漫画雑誌に目を向ける。
　数分で悠里への返事を書き終えると、竜は送信ボタンを押した後、メールボックスを閉じて、夕凪の方に向き直った。
　彼女はベッドの上にうつ伏せに寝転がって、漫画雑誌を読みふけっていた。
「おい」
「…………ん？」
　竜の呼ぶ声に、少し間を空けて夕凪は顔を上げた。どうやら物語

の中にどっぷり浸かっていたようだったが、それを妨げた竜に罪悪感は微塵もない。
漫画雑誌を閉じて身体を起こす夕凪に、竜は訊ねる。
「何の用だ？　俺に勉強を指導してもらいたくなったか？」
「違う違う」
夕凪は顔の前で手を振りながら、どこからともなくディスクケースを取り出した。クリアカバーのそれには『課題：1』と書かれたディスクが入っている。
怪訝な表情をする竜に、夕凪は告げた。
「こいつの中身、開いてくれない？」

一人歩き　ａｎｄ　希望の光

話は一〇数分前に遡る。
夜の闇に沈んだ公園を、夕凪は数分前の出来事を思い返しながら歩いていた。
あの後、夕凪は黒づくめの捜索を再開したが、数一〇分経っても、その姿はおろか気配すらも見つけられなかった。
夜の闇も深まっていくのを感じ、これ以上は時間の浪費と考えた夕凪は、その後、どことなく敗北感のようなものを感じて肩を落としつつ、鞄を持って帰路に着くことにしたのである。
公園の出入り口付近に来たところで、夕凪は思考を巡らす。思えば、さきほどの内容は補習で疲れた自分の頭が作り出した妄想なのかもしれない、と。
不審者に話しかけられ、その不審者から謎のアイテムを受け取り、挙句その不審者は一瞬で消えてしまうなんてこと、まさしく夢か作り話のような内容だと。
そう言ってしまえばそう思えなくもなかったが、彼女の手にはその不審者から手渡されたアイテム――例のディスクケースがあり、それが数分前の会話の一部始終が偽物ではなかったことを物語っていた。

「パソコンで起動可能って、言ってたよな……」

夕凪は黒づくめの言った言葉を反芻しながら、手元のディスクケースを見た。透明なプラスチックの板越しに見えるディスクは、表面に『課題：１』と書かれている以外は、何の変哲もないただのディスクにしか見えなかった。

「『課題』ってワード聞くと、何か体が拒否反応のようなものを示

すんだよなぁ………、ん？」

そう呟いてディスクを街灯にかざして見上げる夕凪は、ふと、街灯の真下に来たところで足を止めた。

別に誰かからの視線を感じて身構えたわけではなく、かといって人口の灯りが恋しくなって狙って止まったわけでもない。脳裏をよぎったとある思考が夕凪を立ち止まらせ、その立ち止まった地点がたまたま街灯の真下だっただけだが、そんなことは夕凪にとって些末な問題であった。

「………パソコン？」

ポツリ、と口から出た単語を自分の耳に再収納し、脳で再処理をかけて認識した後、夕凪は少し感覚を空けて、思い出したように呟いた。

「ウチ、パソコンないじゃん……」

カアッと。

どこかで、夕方の内に山に帰れなかったカラスが鳴いた。

夕凪の手元からディスクケースが離れ、重力に引かれてアスファルトの地面に落ちた。ついで、ガクッと夕凪は足元の地面の上に膝をつき、両手をつけて項垂れ、完全に落ち込み体勢に入る。街灯の灯りの下でやってるので、漂っている哀愁の度合いは半端ではなかった。

情報化社会である現在、パソコンの普及は僅か数年で飛躍的に上昇しており、今では持っていない家庭を見つけるほうが難しい時代だ。

燈村家はその少数派、つまりパソコンを持っていない家庭に属している。
自分の家と他の家との文明レベルの違いに今更気づいた夕凪は、その現実にその場で自沈したのであった。

「どうすんだよ、これ……」

力無く呟きながら、地面に落ちたディスクを見つめる。落下の衝撃は結構なものであったはずだが、ディスクケースは傷一つ無く、また中身を飛び出させることもなく地面に落ちていた。見る人が見れば、そのケースの耐衝撃性能に度肝を抜かれただろうが、夕凪の瞳には、その中身を自分では見ることができないという冷たい現実としてしか映らなかった。
夕凪は上体を起こすと、ディスクケースを拾い上げ、再び表面を見直す。黒づくめが言った言葉が、脳裏をよぎった。

『それは、君のような子どもが求めるものを得るためにクリアすべき課題だ』
「って、開けないいんじゃ、クリアも何もないだろ……」

言って、夕凪は空を仰いだ。
遠い夜空では月が淡く輝き、小さな星々がチラチラと光っているのが見えた。それらは、まるで夕凪を慰めようとしている儚い希望に見えた。
それは本当のところ、思い込みに過ぎないのだが。
少し気持ちを持ち直し、視線をやや落とすと、住宅街の中で一軒だけ、灯りの入った看板を掲げている店が見えた。自宅兼用の小さな八百屋の灯りだ。

「…………、ああ」

知らずの内に、夕凪は声を漏らしていた。
理由は簡単だった。
目の前のそれは、まさしく夕凪の希望の光だったのだ。

会談　and　解析

「という経緯の末、お前ん家に邪魔してるわけだ」
「…………」
竜への説明を終えた夕凪は、少し威張り気味に胸を反らした。
対して、竜は眉間にしわを寄せて黙り込む。
彼なりに夕凪の説明を要約すると、こうだ。
帰り道の途中で、黒づくめの言った言葉を思い出し、自分の家では『課題』を出来ないことに気づいた彼女は深く落ち込んだが、近所の八百屋の息子である友人、不破竜がパソコンを持っていたことを思い出し、そこに転がり込んできた、と。
竜はそこまで理解すると、顔を上げて夕凪を見た。

「一つだけ、訊いていいか？」
「なんだ？」

竜の神妙な顔に威圧され、少し後ろに下がる夕凪。
そんな彼女に、竜は二言。

「お前、アホだろ」
「なんで？」

キョトンとした表情をする夕凪に、竜は溜息を一つ吐いた後、一泊置いて問いかけるように言う。

「なんでいきなり現れた不審者と普通に会話しているんだ？　そして、なんで不審者から普通に物を受け取っているんだ？　今時、そんな怪しい人物とは目を合わせる奴すらいないぞ？」

「いや、だって話しかけられたし……」
「知らない人に話しかけられても、決して相手にするなって、幼稚園の時に習わなかったか？」
「そんな悪い人に見えなかったし……」

少しずつ、自分の言葉に対して反論する夕凪の声が少しずつ小さくなっていくのを、竜は感じていた。だが、彼は彼女に正論のみを語り続ける。

「人を見かけで判断するな。そりゃあ、俺の家の右隣に住む桑田さんは見るからにヤクザ風の強面だが、中身は度の過ぎたお人好しだ。逆に左隣の富士さんは見た目美人で人当りのいい感じのご婦人だが、中身はどす黒い陰険な詐欺師だ」
「………」
「だが、初対面の人間に対しての印象はやはり見かけだろ？　このクソ暑くて日差しのキツイ季節に、夕方とはいえ黒一色の服装で帰宅途中の女子中学生に話しかけてくるような人間は、本人には悪いかもしれんが、完璧に警察沙汰ものの不審者だ」
「まぁ、確かに……」
「そんな人間と普通に会話していたお前は、つまり度を抜いたアホだ」
「ぐっ………」

竜の口上が終わり、それを全て聞いて反論の余地の無いことを理解した夕凪はがっくりと肩を落とした。
狭い室内を、沈黙が包み込む。
しばらくして、竜は再び溜息を吐いた。
いつものことだった。
夕凪が自分の所業のあらましをこれ見よがしに語り、竜がそれについてあれこれと意見し、最終的に夕凪がふてくされるか、うつむ

いて黙り込む。二人が面と向かい合って話しをした時の帰着点は、幼稚園の時から全く変わらない。

「で、なんだ……」

そして、沈黙に弱い竜がこの後に取る行動も、全く変わっていない。

頭を掻きながら、竜は同情の目で夕凪を見つめ、言った。

「俺は、お前のようなアホを救うために、何をすればいい？」

「リュウってさ……」

沈黙していた夕凪はそう呟いて、顔を上げて竜を見た。

彼女の表情には、呆れと諦めで疲労の色が浮かんでいる。

「ホント、人の心をメッタ刺しにするの、上手いよな……」

「俺は自分が正しいと思うことを口にしているだけだ」

「なるほどな……って、それはつまり、あたしがアホだっていうのが」

「正しいってことだ。俺の中では」

「……うん。まぁ、いまはいいや」

もう色々と諦めたぜ、という風なジェスチャーを出しながら、持ってたディスクケースを竜に差し出す夕凪。

相手がそれを手に取るのを確認し、彼女はこう告げる。

「それが、あたしのようなアホを救うために必要なものだよ」

「なるほど」

夕凪の言葉を聞いた竜は、口元を吊り上げて笑みを作る。そして、

ディスクケースを開いて中身を取り出しつつ、
「アホであることを自分でも認めたな」
「潰れろ」
竜の呟きに対し、夕凪は正拳突きで答えた。
しかし、竜はそれを片手で受け止めると、空いている手でディスクをパソコンに取り入れ、読み込み作業を始めた。
程なくして、画面上に何かのプログラムが欄列するウィンドウが表示される。
竜はそれを一通り眺めた後、キーボードを何度か叩いていく。
ちなみに、一連の動作は夕凪の拳をしっかりと握った状態であり、その間、自分の手を解放しようと押したり引いたり、空いている手足で攻撃を仕掛けたりしてくる夕凪の行動を全て把握・対処していたりする。
しばらくして、
「夕凪」
「なんか出た、あぁああっ！？」
受け止められて掴まれたままの拳をどうにかして取ろうと四苦八苦する夕凪を解放して、竜は画面を指差す。
この時、いきなり解放された夕凪は勢いよく後方に倒れ、ベッドの側面の堅い部分に後頭部を打ちつけ、悶絶していたりする。
竜はその様子を一瞥すると、
「早く見ろ」
「この状況を見て助けようとか思わないのかぁ！？」
「自業自得だ」
「もとをただせばあんたのせいですけどね！」

竜に向かってありったけの怒号を浴びせながら起き上がる夕凪。
しかし、竜が余裕の表情でそれらを受け流すのを確認した夕凪はふてくされた表情になりつつ、彼の背後から身を乗り出してパソコンの画面を覗き込んだ。

「ったく…………、ん？」

舌打ちしながらディスプレイ上に浮かんだディスクの内容を見て、夕凪は眉をひそめた。

論争　and　懐柔

原因は、視界に入ってきた、目を引くように派手な書体の大きな文字で書いてある、タイトルらしき一文。

『Vision､s Field』。

「えーっと、ヴぃしおん……？」

「『ヴィジョンズ・フィールド』。直訳で『幻想的な場所』、か……？」

たどたどしい様子で訳す夕凪の言葉を押しのけるように、竜が淡々とした口調で画面の英文を訳した。

タイトルの下には『GAME　START』やら『SETUP』という文が順に並んでおり、それらを一通り眺めた竜は、分かりきった結論を出す。

「見た感じ、ディスクの中身はゲームのようだな」

「うへぇ、マジかよ……」

背後で溜息を吐いた夕凪に、竜は顔を向けると、

「どうした？　気持ちの悪い溜息を吐いて」

「一言多いわっ！」

言葉と同時に鋭い右足蹴りが放たれるが、竜は首を動かすだけでそれを避け、足首の辺りを掴んでしまう。

いきなり片足立ちの体勢を強要された夕凪は、危ういところでバランスを保ちつつ、言葉を吐く。

「わかるだろ？　どうした、っていうのの理由っ！」
「お前が知恵を使うゲーム全般苦手だ、っていうことか？」
「そうだよ、と」

掴まれていた足を解放された夕凪は、今度は転倒しないように気をつけながら、両足を地面に下ろして、溜息交じりに語り始める。

「これまでの人生。テレビゲームはおろか、カードゲームも将棋もオセロも、トランプのババ抜きですら勝った試しがない。……おかげでゲームを介した賭け事をする気は全く起きなくなったよ」
「昔はよくやってたのにな」
「お・ま・え・が、あたしを毎度賭け事のグループに引き込んでいたんだろうが！　おかげで負けには負けまくって、あたしは財布だけでなく身ぐるみまで剥がされかけたんだぞっ！」

ちなみにその時は、半裸状態にまでなった夕凪がキレて、賭けに参加していた野郎全員を蹴り倒したことで勝負が無効になるというお粗末な結果になったという。

夕凪の悲しい過去話が語られる一方で、竜はうんうんと頷きながら、

「お前が毎度負けまくってくれるおかげで、俺が大損することは無かったんだよな……」
「遠い目であさっての方向見てんじゃねぇよっ！　感慨にふけるほどいい思い出じゃねぇよ、あたしにとっては！」

その時のことを回帰して夕凪は涙を浮かべると、怒り心頭で竜を殴りかけるが、先ほどから全ての攻撃を防がれているのを思い出し、どうにか拳を押しとどめる。

その様子を見た竜はほくそ笑むと、
「それはさておき、問題のディスクについてだが……」
そう言って、竜はディスプレイをコツコツと指で叩いて夕凪に示す。
「こいつをクリアしたら、何が起こるんだって？」
「あたしの求めるものが手に入る、ってさ」
「お前の“ような奴”が求めるもの、だろ？」
「……意味は同じだろ？」
「若干違う」
竜の含みのある言い方に、夕凪は苛立ちと共に眉をひそめる。
竜は言葉を続ける。
「お前のようなっていうのは、つまり“お前のような若者“ならいいってことだろ？」
「……少女限定かもよ？」
「じゃあお前にも無理だろ？」
微笑を浮かべて告げる夕凪に、竜は淡々とした調子で言葉を返す。夕凪が強大な殺気を放っているのを感じ取りつつ、竜は顔色一つ変えずに、こう告げた。
「じゃあそれについても調べるということで。……今日は俺がこれを預かって、試しにプレイしてみてもいいか？」
「却下」
竜の意見に夕凪はそう即答すると、パソコンのディスクドライブ

の開閉スイッチに手を伸ばした。
しかし、竜はスイッチと夕凪の手の間に自分の手を伸ばして夕凪の手の進行を遮り、やおら面倒くさそうに訊ねる。

「……理由を聞かせてもらおうか？」
「そりゃこっちの台詞だってーの」

夕凪は手を引っ込めずに、続ける。

「もしそれでお前がこのゲームをクリアしちまったら、お前の夢が叶っちまうだけで終わりじゃねぇか。あたしの立場はどうなる？」
「少し中身を見るだけだ。……問題ない。何かの弾みでクリアすることに陥ることになったら、その前にＰＣのプラグを引っこ抜いてでも止めてやる」
「信用できるかっ！　昔からあたしを騙しまくってきた男の言うことなんかっ！」

頑として譲らない態度を示す夕凪の様子に、竜は深い溜息を吐くと、こめかみを指先で二回叩き、やおら額に汗を浮かべながら、こう言った。

「じゃあ、今年の夏休みの宿題、全部引き受けてやる」

直後、夕凪の身体の動きがピタリッと停止した。
ギギギッと、油を差してないいらしいからくり人形の関節部みたいな音を上げる首を動かして竜の顔を見やり、

「ナン、ダッテ……？」

夕凪の問いかけに、竜は後頭部を掻きながらもう一度言った。

「おまえの夏休みの宿題を、俺が引き受けてやる。それが、俺が負担する条件だ」

直後、夕凪の全機能が一時急停止した。

無理もなかった。というのも、今年の夕凪の夏休みの宿題は、一般生徒のそれを遥かに超過している量だったのである。

一学期における最悪の授業態度と最低のテスト結果を見た『心優しい』担任こと菊芝が夕凪のためを想い、終業式の後に職員室に当人を呼び出し、過去の授業範囲をまとめた特別冊子（厚さ一四センチ）を手渡しながら「じゃあ、また明日な♪」と笑顔で言われた、という長い経緯がある。

補習自体は夏休み前半に終了するのだが、夕凪が手渡されている特別冊子の中身は、たとえ彼女が不眠不休でやっても、夏休み中には到底出来ない代物なのだった。

それを、目の前の親友がやってやる、と言っているのだ！

頭の中で何かを熟考しているらしく、しばらくブツブツと口元のみを動かす夕凪。

「（宿題帳消し、だとっ……しかし相手はあたしを嵌めてきた策士……過去は水に流すべき……いやしかしっ……）」

どうやら、脳内天使が脳内悪魔と闘争を繰り広げているのを実況中継中らしかった。

そのまま数秒が経過する。

そして、勉強嫌いの補習少女は顔を上げ、竜に向かって小さく頷きながら、

「…………許可する」

伸ばしていた手を引っ込めて、そう呟いたのであった。

論争　ａｎｄ　懐柔（後書き）

久しぶりの投稿ッス。

って、二ヶ月以上も間を空けてしまうとは……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3000r/

夢幻商人と少女の戦争

2011年11月16日21時38分発行